

解答例

専攻名	数物科学専攻（数学コース）（一般選抜）
試験科目名	専門科目 数学 （1 / 2）

採点においては解答のプロセスや記述の論理性も重視した。以下では、そのプロセスがわかる程度の略解を一つ示したが、異なる方針の解答もあり得る。また、具体的に解を求める問題では、解の表し方が以下とは異なる解答もあり得る。

[1] (1) 2。

$$(2) W_2 = \left\{ a \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix} + b \begin{pmatrix} 3 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix} \mid a, b \in \mathbf{R} \right\}, \widetilde{W}_2 = \mathbf{R}^3.$$

$$(3) P = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ -1 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \end{pmatrix}.$$

[2] (1) 線型写像の定義 ($T_g(\lambda_1 X_1 + \lambda_2 X_2) = \lambda_1 T_g(X_1) + \lambda_2 T_g(X_2)$, $X_1, X_2 \in V$, $\lambda_1, \lambda_2 \in \mathbf{R}$) に基づいて示す。

$$(2) V \text{ の基底 } S \text{ に関する写像 } T_g \text{ の表現行列は } \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1/2 & 0 \\ -1 & 2 & -1/2 & 1 \\ 0 & 0 & 1/2 & 0 \\ 0 & 0 & -1/2 & 1 \end{pmatrix} \text{ となる。}$$

(3) $\dim \text{Ker}(T_g - \text{Id}_V) = 2$ であり、基底の例として $\left\{ \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \right\}$ が取れる。

$\dim \text{Im}(T_g - \text{Id}_V) = 2$ であり、基底の例として $\left\{ \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \right\}$ が取れる。

[3] (1) $x \in [0, 1]$ について $|g(\frac{x}{2})| \leq \max_{x \in [0, 1/2]} |g(x)|$, $|g(\frac{x+1}{2})| \leq \max_{x \in [1/2, 1]} |g(x)|$ となるので、次のように求める不等式が導ける。

$$4|g(x)| = \left| g\left(\frac{x}{2}\right) + g\left(\frac{x+1}{2}\right) \right| \leq \left| g\left(\frac{x}{2}\right) \right| + \left| g\left(\frac{x+1}{2}\right) \right| \leq \max_{x \in [0, 1/2]} |g(x)| + \max_{x \in [1/2, 1]} |g(x)|.$$

(2) $|g(x)|$ は $x_0 \in [0, 1]$ において最大値 $|g(x_0)|$ になるとする。(1) の不等式を用いると

$$4|g(x_0)| \leq \max_{x \in [0, 1/2]} |g(x)| + \max_{x \in [1/2, 1]} |g(x)| \leq |g(x_0)| + |g(x_0)| = 2|g(x_0)|$$

を得る。つまり、 $|g(x_0)| \leq 0$ となり、最大値 $|g(x_0)|$ は 0 となる。

(3) 任意の $x \in [0, 1]$ について (2) より $|g(x)| \leq 0$ が成立する。つまり、 $|g(x)| = 0$ なので、 $g(x) = 0$ となり、 $g(x)$ は 0 に値をもつ定数関数となる。

解答例

専攻名	数物科学専攻（数学コース）（一般選抜）
試験科目名	専門科目 数学 （2 / 2）

- [4] $D_n = \left\{ (x, y) \in \mathbf{R}^2 \mid x^2 + y^2 \leq 1 - \frac{1}{n} \right\}$ ($n \in \mathbf{N}$) とおくと, $\{D_n\}_{n \in \mathbf{N}}$ は D の近似増大列である。極座標変換を用いることで

$$\iint_{D_n} f(x, y) dx dy = \begin{cases} \frac{2\pi}{2-\alpha} (1 - n^{-1+\frac{\alpha}{2}}) & (\alpha \neq 2) \\ \pi \log n & (\alpha = 2) \end{cases}$$

と計算できる。よって、広義積分が収束するための必要十分条件は $0 < \alpha < 2$ であり、そのときの広義積分の値は $\frac{2\pi}{2-\alpha}$ となる。

- [5] (1) $a \neq 0, 1$ のとき, $1/P(z)$ は $z = -a \pm \sqrt{a^2 - a}$ で 1 位の極をもつ。 $a = 0$ のとき, $1/P(z)$ は $z = 0$ で 2 位の極をもつ。 $a = 1$ のとき, $1/P(z)$ は $z = -1$ で 2 位の極をもつ。
- (2) まず, (1) より極の位置を確認する。 $|-a - \sqrt{a^2 - a}| > 1$ なので, 一つの極は円 $|z| = 1$ の外側にある。次に $(-a + \sqrt{a^2 - a})(-a - \sqrt{a^2 - a}) = a^2 - (a^2 - a) = a$ を用いると $|a - \sqrt{a^2 - a}| = \frac{a}{a + \sqrt{a^2 - a}} = \frac{1}{1 + \sqrt{1 - a^{-1}}} < 1$ なので, もう一つの極は円 $|z| = 1$ の内側にある。したがって, 留数定理より次を得る。

$$\int_{|z|=1} \frac{1}{P(z)} dz = 2\pi i \frac{1}{-a + \sqrt{a^2 - a} + a + \sqrt{a^2 - a}} = \frac{\pi i}{\sqrt{a^2 - a}}.$$

- [6] (1) $W(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \{1, 4, 5\}$ より $d_H(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = 3$ となる。
- (2) $\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n)$, $\mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n)$, $\mathbf{z} = (z_1, \dots, z_n)$ とする。 $i \in W(\mathbf{x}, \mathbf{z})$ としたとき, $i \in W(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \cup W(\mathbf{y}, \mathbf{z})$ が成り立つことを示せばよい。このことは, $x_i \neq z_i$ ならば「 $x_i \neq y_i$ または $y_i \neq z_i$ 」の対偶が「 $x_i = y_i$ かつ $y_i = z_i$ 」ならば $x_i = z_i$ であることより従う。
- (3) 関数 d_H が四つの性質（非負値性）（非退化性）（対称性）（三角不等式）を満たすことを確認すればよい。非負値性と非退化性と対称性については d_H の定義に基づいて示す。 $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z} \in X$ とし, 集合 A の元の個数を $\#(A)$ で表す。このとき, (2) より

$$\begin{aligned} d_H(\mathbf{x}, \mathbf{z}) &= \#W(\mathbf{x}, \mathbf{z}) \leq \#(W(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \cup W(\mathbf{y}, \mathbf{z})) \\ &\leq \#(W(\mathbf{x}, \mathbf{y})) + \#(W(\mathbf{y}, \mathbf{z})) = d_H(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + d_H(\mathbf{y}, \mathbf{z}) \end{aligned}$$

を得る。つまり, d_H は三角不等式を満たす。